HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内陸アジア史研究と中央ユーラシア史 : 近現代新疆研究の動向を中心に
Author(s)	新免, 康
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 110-111
Issue Date	2019-07-31
DOI	10.14943/jacas.15.110
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88367
Type	article
File Information	JB015_015shinmen.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

内陸アジア史研究と中央ユーラシア史
―― 近現代新疆研究の動向を中心に ――

新免　康

本報告では、近現代史に主眼を置き、日本における内陸アジア史研究の歴史的潮流の文脈の中で中央ユーラシア史研究の動向の特徴について触れた上で、近年の新疆史研究の動向について言及する。

まず、本報告における地域区分・名称について、本パネルセッションの主題となっている論集で扱われている範囲を斟酌する形で、「中央ユーラシア」をユーラシア中央部のムスリム居住地域として設定する。これに対し、「内陸アジア」は上記のような「中央ユーラシア」に、モンゴル、チベット、満洲などの諸地域を加えた、広域的な領域を指すものとする。この意味での「内陸アジア」は、ムスリム地域とチベット仏教徒居住地域に分かれる一方、歴史上の国家的枠組に関しては、清朝－中華民国－中華人民共和国と、ロシア帝国－ソ連、という区分を見出すことができる。この中で、ムスリム居住地域として「中央ユーラシア」に含まれる一方、清朝時代にその版図に組み込まれ、現代中国の領域の一部を構成するという地域としての特性を備えた新疆は、ユニークな位置づけをもつと言える。

日本における内陸アジア史、とくにモンゴル史・満洲史に関する研究は、特有な研究蓄積と歴史的背景をともなっており、世界的に見ても先端的な研究成果を産出してきたとされる。そもそも日本の東洋史学には、その嚆矢が那珂通世『成吉思汗実録』にあると言われるように、中国の西域史・塞外史などを一つの軸として形成された側面がある。また、日本の中国大陸進出と連動しつつ、満洲・モンゴルを中心に、新疆やロシア領・ソ連領中央アジアなども含む諸地域に関する戦略的観点からの研究も進展した。中国東北部（満洲）や河北地域への日本の勢力拡大にともない、これら地域に居住するムスリム（回民）に対する工作と対応しつつ、イスラームへの学問的関心が喚起され、部分的に実地調査をともないつつ研究が推進されたことも看過できない。

第二次世界大戦後、上記のような状況が転換されるにともない、前後の時期で研究動向にある種の断絶は見られるものの、やはり以前の地域的な関与と研究蓄積も背景としつつ、とくに現地語史料の利用に基づくモンゴル史・満洲史に関する研究が高い水準を維持してきた。

これに対し、日本における旧ソ連領中央アジア地域の近現代史に関する研究は、一部の先駆的業績を除けば、とくにここ数十年間で一気に飛躍的な進化を見せたと言って過言ではない。そのことは、本パネルセッションの主題となっている論集の構成・内容に如実に表れている。その背後には、内陸アジア史研究全体において、1990年代以降、ロシア・中央アジア・モンゴル・中国におけるアーカイヴ史料へのアクセスを中心として、史料をめぐる条件が劇的に好転したことにともなう、共通の事情を見てとることができる。ただし、新疆やチベットなど史料面での制約を抱える地域と、モンゴル史研究や中央アジア史研究との間で、研究環境のある種の「格差」が顕在化した面も見逃せない。この点に関しては、近代史において各地域が辿った道筋とその結果固定化された政治的枠組が、研究条件にも反映していると言えるだろう。

さて、日本における近現代新疆に関する研究は、上記のような制約を抱えながらも、1980年代以後、いわゆる現地語史料の本格的な活用を基礎に、まさに新しい地平を切り拓いてきた。とりわけ、19世紀後半のムスリム反乱期、20世紀前半期における改革運動・民族運動などの局面におけるテュルク系ムスリムの活動とその背景、などに焦点を当てた考究において、豊かな収穫が得られたと考えられる。また、中華人民共和国期については、民族政策・民族問題、少数民族をめぐる教育状況、ウイグル人の社会・経済、生活文化・職業文化・ジェンダー、イスラームを軸とする宗教文化・宗教実践、少数民族の民族文化の動態、などに関する実に多彩な研究が、場合により実地調査を踏まえながら続々と出現し、その成果を蓄積した。しかし、近年の趨勢として、新疆をめぐる困難な諸情勢が、史料面も含め、学術研究を取り巻く環境に決定的な暗い影を落としていることは否定できない。

このような諸条件を勘案した上で、新疆近現代史研究の今後の方向性について、考えられる例として、以下の二つのトピックを指摘しておきたい。一つは、越境移動を含む、中央ユーラシアの広域的な地域間関係への視点に基づき、国家間関係と政治変動の文脈との連関において、地域の社会・文化変容にアプローチする研究である。その際、ロシアや中央アジア諸国の文書館所蔵の文書史料を中核とするロシア帝国・ソ連側史料を利用することの有効性は言を俟たない。他方、文学・歴史方面を中心とした、既存の現地語による史料に基づき、いまだ未開拓の領域を残している、精神文化史的な視角からの思想・心性面の検討を通して、新疆の地域性や文化様態に対する理解の深化を目指す研究も想定されるであろう。現在、新疆に関する研究は、現地との学術交流の機会などを閉ざされた苦境の下にあるが、中央ユーラシア史研究のバランスのとれた成熟化に向けて、新疆研究に新たな活性化の可能性が見出されることを期待したい。

（中央大学文学部）